

2025年6月、SATREPSにおけるブータンの内視鏡診療支援の活動報告書

本活動は、SATREPS (Science and Technology Research Partnership for Sustainable Development) の一環として行われた「ピロリ菌感染症関連死撲滅に向けた中核拠点形成事業」に基づき、JICA (Japan International Cooperation Agency) の協力のもと実施されました。2025年5月末より7月初旬までブータン王国の首都ティンブーにあるJDWRH (Jigme Dorji Wangchuck National Referral Hospital) にて、内視鏡診療支援活動を行いました。

ブータン国内では、胃がんが部位別がん死亡原因の第1位となっており、死亡率は世界でも第2位と極めて高く、対策が急務となっています。ヘリコバクター・ピロリ感染が胃がんの主要な原因であることが明らかになっているにもかかわらず、同国ではその対策が十分に講じられていない状況です。また、現在も胃がんの罹患率は非常に高く、課題は山積んでいます。ピロリ菌の撲滅に加え、早期胃がんの内視鏡診断精度の向上、観察方法の標準化、内視鏡治療の支援、内視鏡医の育成など、多面的な取り組みが求められています。



<Jigme Dorji Wangchuck National Referral Hospital(JDWRH)／現地での実際の内視鏡支援の様子>

滞在中は毎日、同院にて上部消化管内視鏡検査を担当する現地医師に同行し、診断支援や診断困難症例への助言、さらには系統的観察法 (SSS : Systematic Screening Protocol for the Stomach、2013年八尾ら報告) の再確認を実施しました。現地医師はSSSを意識した観察を心がけており、早期胃がんが疑われる病変については、私に積極的に助言を求めてきました。6月には、現地医師が病変を指摘し、早期胃がんを発見することができました。当該病変は内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD) の良好な適応と考えられ、今後、日本人医師の支援のもと、現地医師によって治療が完遂されることが期待されます。

一方、院内システムにおける課題も顕著でした。検査台帳が手書きで管理されており、電子カルテや内視鏡ファイリングシステムは患者IDとの連携が困難で、操作も煩雑でした。医師ごとに記載方法が異なるため、将来的にはID紐づけや所見のカスタマイズ機能の導入が望まれます。また、ピロリ菌撲滅を目指す中で、内視鏡洗浄が依然として手洗いで行われ

ている点も問題です。処置具の清潔保持、作業効率の改善、ナースの負担軽減のためにも、自動洗浄機の導入が急務と考えられます。



<外科カンファレンスにて先生方と／SATREPSのJCC 3rd meetingにてKGUMSBとJICAの方々と>

若手のレジデントや軍医の方々からは、「地方での診療において、内視鏡は必要なスキルである」との声もありました。ただし、現状では継続的に内視鏡医としてのキャリアを形成するには課題も多く、現地での後継者育成には困難も伴うと感じられました。しかし、彼らの熱意と意欲は高く、今後、適切な研修システムを整備することにより、若手内視鏡医師の育成は十分に可能であると期待されます。

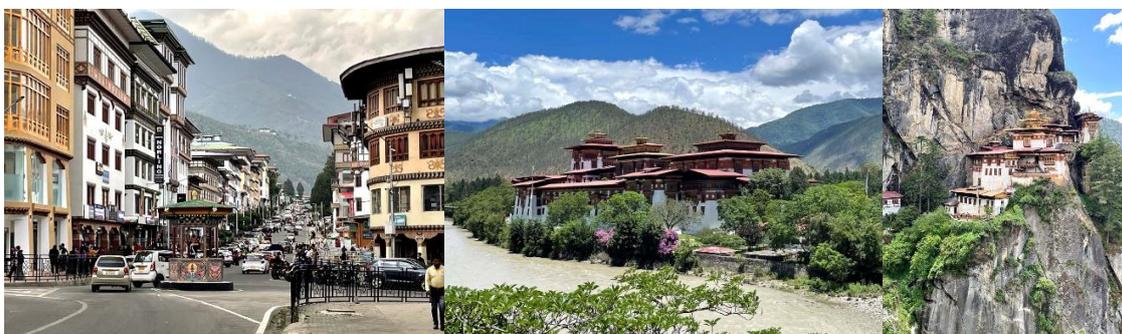
ブータンの食文化は独自性があり、代表的な国民食「エマ・ダツィ」が挙げられます。唐辛子とチーズを煮込んだ料理です。主食は米で、動物性食品は宗教的背景から控えめですが、チーズは重要なたんぱく源として欠かせません。飲み物としては、バターと塩を加えた「スジャ」や、穀類を原料とする伝統的な地酒「アラ」が知られています。また食事は家族や共同体で分け合って食べる習慣があり、人とのつながりを重視する文化が表れています。



<エマ・ダツィを中心とした現地の食事／市場で大量に販売されている唐辛子(エマ)>

ブータンと日本の文化・言語・環境の大きな違いの中で、日本人医師として一人、内視鏡診療に従事しながら現地で生活することは大変なことも多くありました。しかしながら、今回の渡航は限られた短期間であったため、できる限り積極的に現地の方々とコミュニケー

ジョンを取り、さまざまなイベントにも参加するよう努めました。その結果、幸運にも多くの貴重な経験を得ることができました。また、JICA 関係者の皆さまや現地の内視鏡スタッフの方々には多大なるご支援・ご助力をいただき、心より感謝申し上げます。



<ブータン市内の美しい街並み／プナカの Punakha Dzong／パロの Paro Taktsang (Tiger's Nest) >

ブータンは治安も良く安全な国ではありますが、高地特有の厳しい自然環境の中で、人々が仏教を中心とした伝統的な文化を大切に守りながら、近代国家として発展を遂げていく姿に、かつての日本を思い起こし、深い感慨を覚えました。多くの課題を抱える状況ではありましたが、そのような中でも力強く日々を生きる現地の人々の姿に、私自身大きな刺激と学びを得ることができました。体調を崩すことも何度かありましたが、最後まで無事に職務を全うすることができ、安堵しております。



<内視鏡スタッフと Lotay Tshering 元首相/民族衣装を着て Khamsum Yulley Namgyal Chorten にて>

日本では当然のことが、途上国の現地では難しく、限られた資源をいかに工夫しながら発展できるように、共にシステムを構築していくことが出来るかが、今後の課題と考えます。今回のブータン派遣にあたり、業務の調整など多大なご迷惑をおかけしました河上教授ならびに医局の先生方には、心より深く御礼申し上げます。

2025年7月26日
宮崎大学 消化器内科 三池忠